
バカと天才とAクラス

エンゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才とAクラス

【NZコード】

N9873X

【作者名】

エンゼル

【あらすじ】

木下家の幼なじみで文月学園に転入することになった倉石政宗。「天才」と称されたほどの学力と情報収集能力を持っている。しかし、何故か恋愛などの話は鈍感という珍しい人が視点の話です。Aクラス視点です。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

まだ話が単調なので頑張つていこうと思ひます。

エンゼルという名前はパワポケからきました。

では、プロローグです。

プロローグ

NO side

「今から転入生が入場しますので、静かにしてください」

先生が静かにするように呼びかけるが…

「男子かな、女子かな？」

「可愛い女子が来ないかな！」

生徒がざわつくので静かにならない。

「それでは転入生が入場します」

先生が諦めたのかざわめいてるのを無視して転入生をステージにあげた。

「それでは自己紹介をどうぞ」

転入生は2人。男女一人ずつであった。

「ボクの名前は工藤愛子です。よろしくね」

自己紹介を終えると次の人マイクが渡される。

「俺の名前は倉石政宗です。よろしくお願いします」

プロローグ（後書き）

初投稿で緊張しましたが、無事？に書き終わりました。

ペースは週2更新は目指したいと思っています。

倉石政宗（前書き）

エンゼルです。

とつあえずのオリキャラ紹介です。
のちのちにAクラスのオリキャラがでるかもしませんが、見ていく
つてください。

では、オリキャラ紹介です。

倉石政宗

名前 くらいしまさむね
倉石政宗

年齢 16歳

誕生日 1月8日

ルックス 黒色で秀吉位の長との髪、目は褐色

性格 人思い 世話好き

身長 174

体重 58

血液型 A型

得意科目 英語 日本史 世界史

苦手科目 特になし

好きなもの（こと） 料理 バスケ 読書 合気道

嫌いなもの（こと） 害虫 父親 同性愛扱いされること

召喚獣 右手に剣、左手に銃を持ち頭に月のような飾りがついて
る（決して戦国無双とかのではないですよ…）

腕輪の能力 乱射 銃を2つ持ち、引き金をひくと3発の弾がで
る。連射可能
消費点数 秒 × 10点

倉石政宗（後書き）

後書きは次の話から政宗に任せますので、よろしくお願いします。

Aクラスって男子が久保しかいないよね
...

第一回（前書き）

エンゼルです。

話は一年生の終わりぎわの状態です。

少し話し方とか文章間違いがあると思います。初心者なので頑張つて調整したいと思います。

それでは第一回です。

第一回

政宗 side

転入生の紹介の後、俺らは質問攻めにあつていた。

「どうから来たの？」

「アメリカから。俺の親父がそういう仕事だからさ」

「へえ～！アメリカってことは英語ペラペラでしょ～いいなあ～」

「スポーツは何が得意？」

「バスケかな、日本でもアメリカでもやってたから」

親父が仕事でアメリカに行き来してたのは知っていたが、4年前に日本を離れ、アメリカに住むことをお母さんに言つてきた。俺は拒否し、一人暮らしをするはずだったが、結局はアメリカで暮らしすことになった。

「皆さん、倉石君と工藤さんに質問したいのは分かりますが、授業が始まりますよ？」

高橋先生が授業の準備をさせる。

「倉石君、工藤さん。試験召喚システムについての説明があるので西村先生に着いていってください」

「はい」

廊下をでるとそこには…

「お前らが転入生だな？」

「はー……つおーー？」

田の前に全身筋肉質の怪物が！？

「何を驚いている？」

「いやあ… すげえ筋肉だなーと

この人化け物か？ 戦つたら勝てる気がしねえ…

「えつ？ 倉石君ってそっち系の趣味なの…？」

「違う！…」

工藤が「こーひ、 同性愛？」 みたいな田で見てくる。俺はそれが一番嫌いなんだ…！

「とつあえず… 行くぞ。お前らには試験召喚戦争のルールなり召喚獣の操作など覚える」とがたくさんあるんだ」

と西村先生は歩いていく。

「ねえ、 倉石君…」

「何だ？」

少し心配そうな田でこいつを見てくれる。戦争やらオカルトのシステムとか恐がってるのか？

「倉石君ってさ、 攻め？ 受け？」

「だから…俺はそんな趣味はねえーーー！」

心配した俺が馬鹿だった。

明久 side

「ねえねえ雄一」

「何だ明久」

「転「却下だ」入生を見…つて速いよ…?まだ転しか言つてないよ!
!?」

「悪いが行く気にならない(翔子がいるから行く気にならない)ん
だ」

「じゃあ、ムツツリーー。一緒に行こうよ」

秀吉はさつきお姉さんに連れていかれたのでいない。

「……新商品は高く売れる」

この人は転入生を何だと思っているのだろう

「もう、授業始まるぞ」

「大丈夫だよ。ちょっとサボつたて…」

キーンコーンカーン(チャイムが鳴る音)

ガラツ(鉄人入場)

クルツ、スタスター（回れ右をして席に戻る僕とムツツリーーー）

「…と思つていたけど、勉強する気が湧いてきた…！」

「…………サボる気はもうそらしない」

タイミングの悪さにビックリだよ畜生…！

「今日は担当の先生が転入生の模擬試験召喚戦争の手伝いをするから俺が担当だ」

「うわー！？最悪だあーーーーーもう少し早く行けばよかつた…！」

鉄人は僕のことを問題児扱いするから担当になると脱出も厳しい…

「今日は……ん？木下は早退か？」

「ん？そういうえば秀吉がいないな。お姉さんに連れていかれてから帰つてきてない。」

「姉に呼ばれてそれつきり帰つてきてないな」

「木下が授業をサボるのはないからその理由だらう。といつわけで世界史をやるやで」

その後、秀吉は授業の終わりぎわに帰つてきた。理由は「姉上に呼ばれた」としか言わなかつた。

優子 side

アタシは転入生の自己紹介の後、弟である秀吉を空き教室に呼び出した。

「姉上? どうしたんじや?」

「倉石政宗のことよ?」

アタシ達の幼なじみの政宗。あの髪と田はアタシ達の知ってる政宗そのものだった。

「…恐らくじやが、あれは政宗だぞい。喋り方や一人称が違つたがの」

政宗は一人称は自分だった。アタシ達が知らない間に少し性格が変わっているのかもしれない。

「会いに行きましょう。政宗とは別れの言葉なしだったから

秀吉は少し思案顔になつた…授業をサボることをためらつてゐるのかしづつ。

「……やつじやの」

アタシ達は授業を初めてサボつた。

第一回田（後書き）

政宗「作者に任されてもすることがねえんだが！？」

作者「だって政宗は、今んとこ本編で喋つてないからねえ～」

政宗「そういうえ、何で俺は害虫が嫌いという設定なんだ？」

作者「だつて、キャラ作りの時に「あれ？ コイツ完璧すぎね？」とか
か思つたから

政宗「だからつて女っぽい特徴を作るな

作者「まあ、次作頑張つて」

政宗「適當だな」

第一回 題材（前書き）

エンゼルです。

話は1学年の終わりぎわから少し友達作りの話で1巻に入らないかもです。

補足ですが、政宗の喋り方は明久と雄一を足してわった感じなので分かりづらいと思います。

それでは、本編です。

政宗 side

「……とこつわけです。分かりましたか？」

「「はい」」

田中先生があつとつとした口調で喋る。IJJの学校は本当に面白い。戦争とかめちゃくちゃ楽しむつだ。

「次は戦争での試験召喚獣を召喚・操作をやりましょ。召喚獣を召喚する言葉は試験召喚です。では工藤さん、言つてみてください」「分かりました。試験召喚！」

工藤が召喚獣を召喚する。

Cクラス 工藤愛子 世界史 301点

「工藤さんは優秀ですね。この調子なら振り分け試験はAクラスですか」「どうもです

工藤は頭いいんだな。からかい口調だからつこつとい頭が悪いかと思つてた。すまない工藤。

「次は倉石君ですよ」

「試験召喚！」
「サモン

世界史か…一応得意科目だし、今回は出来が良かつたはず…

Cクラス 倉石政宗 世界史 782点

「…………」「

あれ？何か無反応だ…何かおかしかったのか…？

「えええ！？な、な、何この点数！？倉石君、君って何者…？」

「これは先生の私より強いですね……倉石君はもしかしてアメリカではかなりレベルの高い高校でしたか？」

「いいえ…確かに世間一般的には普通の高校でした」

日本人が学年首席もおかしいと親父に言われたから、20位に調節してたけど。

「にしてもこの点数は……異常ですよね」

「学年首席をとれるレベルですね」

「俺の得意科目だからですよ」

「とりあえず教科を変えましょつか……倉石君、一番苦手な教科は何ですか？」「古典だと思います。一番出来が悪かったので」

田中先生が古典の先生を呼んでいたそのうでの暇になつた。フイールドがまだ消えてないため自分の召喚獣を見てみる。

右手に刀、左手に銃、そして頭には月の飾りがついてる。隣の工藤は凶悪そうな斧を持っていた。

「倉石君つひで、」

「同性愛者ではない」

「違うよ。この学園に気になる人がいるのカナ?」

「……つ!?

「ステージにあがつた時から全体見回して誰か探してたみたいだつたからね」

「幼なじみだよ。木下姉弟つていうんだけどさ」

どうやら、上藤は気付いてたらしく、この学園に秀吉や優子がいるから転入してきた。理由はそれ以外何物でもない。俺のせいで一言も別れの言葉を言えなかつたから。

「へえ、その人のこと好き?」

「ああ、もちろんだ」

そりや、小さい頃から一緒になんだから好きに決まつてゐる。

「ふーん。倉石君もそういう所あるんだね」

「どうこう意味だよ?」

俺も中学の頃じゃ、「世話好き」やら「お人好し」などと言われてたな。性格が合つてないつてことだらうか?

「実は攻め?」

「違うからーつ!?

俺のトラウマをついてくるのが痛いぜ……しかも実は攻め?つて、俺を受けだと思つてたつてことかよ……

「古典の教師を……って大丈夫ですか？倉石君？」

「だ…大丈夫です…」

同性愛者というトラウマで地面に跪く俺を見て心配してくれた。その後は、召喚獣を戦わせて過ごした。

「休み時間か…」

転入したばかりの俺に休み時間というのは暇である。友達の1人や2人作っておきたいな…

「政宗…？」

「ん…優子か！？」

「政宗だよね！？」

「久しぶりだな！！」

「政宗！久しぶりじゃのー！」

久しぶりに会う2人はとても成長していた。男の子なのに女の子に間違えられる秀吉。優等生でいつも先生、友達に頼られてた優子。今でもその面影は残っている。

「……2人とも話したいことがあるんだけど…時間あるか？」

「アタシは大丈夫よ」

「ワシも大丈夫じゃ」

俺は空き教室で2人と話すこととした。この2人は突然いなくなつた俺のことをどう思つてゐるのか不安だつた。

「秀吉、優子。今の俺の家庭事情なんだが……両親が別居状態。親父の目がなくなつたから昔と違つて自由の身になつた。だから前のことではない……ってところだ」

「……」「……」

母さんと親父の関係がこじれたから、日本に帰れたつて感じだから心境は複雑である。

「転校したのは、政宗のお父さんの影響つてことかの？」

「そうなる。あんな親父の息子じゃなければ、お前らに迷惑をかけることだつて、転校だつてなかつたんだ」

「別れの言葉もなかつたもの？」

「……親父のせいだ……」

「突然いなくなつて姉上が泣きそつた……姉上つ！その関節は曲がら……」

「……優子。相変わらずだな……」

「まったく、政宗は心配性ね……別れの言葉はなかつたけど、アタシはまた会えるつて信じたから……」

優子が微笑んで言つてくれた。昔から秀吉と優子に救われた。だ

から自由の身になった今、恩を返したいと思つてゐる。これでまた5年前と同じ関係に戻れたのだろうか……

「姉上……せりつと恥ずかしいことを言つておらんか?」「……気にしないの//」

あれ? 優子の顔が赤いな? 大丈夫だろ? か?

「それより、お前ら授業は大丈夫なのか?」

「ワシらは授業をサボったのじや。だから政宗がアメリカにいた時の話を聞いてみたいのじやが」

「……珍しいな。お前らが授業をサボるなんて。優子はともかく、秀吉は大丈夫なのか?」

「言えてるわね」

この後、優子達は教室に戻つていつた。俺は初授業をサボり、木下姉妹と空き教室で過ごした、という噂が流れてしまつた。

明久 side

昼休み、僕らは明日の昼食代をかけた「ダウト」をやつていた。

「俺は5だな」

「ワシは6じゃ」

「…………」

「んー……じゃ、じゃあ「ダウトだ」……って早つ！？」

「明久、バレバレじゃぞ？」

「…………分かりやすい」

どうしよう。みんなから鴨にされてる気がする。このままじゃ、みんなに奢るはめに……つ！流れを変えなきや…………

「秀吉ー？いるか？」

「待つておつたぞ、政宗。こっちへ来るのじゃ」

「ああ」

一人の見知らぬ男子が秀吉を呼んだ。あれは転入生の人だつたっけ？かつこいい人だなあ、この人なら秀吉の彼氏だつたら許せる……つて落ち着け、僕！秀吉は男だぞっ！！

「初めてまして、倉石政宗って言います。秀吉とは幼なじみです」

秀吉の幼なじみの人は倉石君が初めてだ。もしかしたら、秀吉のことを色々聞けるかもしれないから自己紹介を慎重に……！

「俺は坂本雄一だ」

「…………土屋康太」

「僕は吉井明久だよ」

自己紹介を終えると、倉石君は笑顔で……

「よろしくな」

つと言つた。あれ？笑うと可愛い……つて！何してるんだよ、僕！
！男だぞ！！

「政宗もトランプをやつしてみぬか？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「じゃあ一回、賭けのことはなしに」「諦めろ」しょ……くつー先手
を打たれたか……」

この間に秀吉×倉石君のショットが撮られて売り捌かれたことを後
々知つた。

「俺はフだな
「坂本、ダウト」

倉石君が雄一にダウト宣言をした。雄一はこいついうゲームは得意分
野で雄一にダウト宣言をするのはあまり得策じゃない。まあ、倉石
君は雄一が「神童」と呼ばれてたつてことを知らないから仕方ない
だろう。

「くそつ……ばれたか……」

雄一の出してたカードは「」だった。初めて雄一がダウト宣言された
瞬間だと僕は思った。

「倉石君、すごいね。雄一がダウトされたの初めて見たよ」「明久、政宗にカードゲームで勝つのは無理じゃ」

秀吉が少し嬉しそうに言つた。勝つのが無理つてどうこういふの？

「秀吉、どうこういふことだ？」

「政宗は、瞬時に自分のカードを記憶して、誰に何がいつたかを覚えておるのじゃ」

「？？？」

倉石君がそうとう記憶力がいいってこと？確かにカードゲームは記憶力が良ければ強いのはあるかもしれないけど……

「…………情報処理能力が高い」

「おそらく、ムツツリーーーの言つとおりじゃ」

「「めん、秀吉。僕にも分かるように説明してくれる？」

「明久。倉石が最初にダウトしただろ？」

「うん」

まだ場が一週した時にもうダウト宣言したのは倉石君だつた。もちろんカードは倉石君にいったけど……

「倉石は誰が嘘をついてるのを確認するためにわざとカードを拾つたんだ」

「なるほど……」

と……なると

「今の僕の手札は4枚だけ、倉石君なら何の数字か分かるつてこ

と?」

「一応、分かるよ。吉井は3、7、8、Qを持つていいはずだ
「……正解だ……」

倉石君の言ったとおり、僕の4枚のカードは3、7、8、Qだ。倉石君ってめちゃくちゃ凄い人なんじゃない?

「政宗とは一度、ブラックジャックで勝負してみたのじゃが……表情や仕草で読まれて全敗したのじゃ……」

「……表情や仕草」

「ムツツリーー。どーぞ反応してるんだ」

倉石君は心理戦に強いってことがずいぶん分かった。倉石君がいる時に賭けダウトしたら何円奢る?となるのだろう

「みんなにお願いなのじゃが、幼なじみとして政宗と友達になつてくれぬか?」

「秀吉……」

秀吉の優しさに感動する。僕が何かあつたら雄一やムツツリーーはほっとかれるけど、秀吉は「大丈夫かの?」と声をかけてくれる。秀吉は友達思いなんだ。なら僕が応えてあげるんだ。

「ねえ、倉石君。政宗つて呼んでいい?」

「……ああ、構わないよ。ありがとう、明久」

政宗はすく嬉しそうだった。僕に続いて

「秀吉に言われたならな

「…………もつカードゲームをやつた仲だ」

素直じやない雄一と親指をグッと立てるマッシュリー。

「ありがとう、明久、雄一、秀吉、マッシュリー」

「…………俺だけ違う」

「もひ、昼休みが終わる頃じゃの」

「じゃあ、教室戻るな」

「じゃあね、政宗」

新しい友達、倉石政宗。秀吉の幼なじみで情報処理能力がめちゃくちゃ高い。それと、笑うと（男だが）可愛い。

第一回（後書き）

政宗「おい、作者。何故に俺は男の娘設定なんだ」

作者「いや、明久の言つたとおり、かつていいのだが、笑うと女子と変わらないような可愛さとこうわけだ」

政宗「世界史と日本史が得意な理由は何だ？英語はアメリカにいたからが理由だね？」

作者「世界史はアメリカにいたから得意、日本史は政宗的な意味で得意」

政宗「適当だな！？」

作者「苦手科目が古典なのは作者が苦手だから」

政宗「まさかの作者…お前テスト何点だよ…？」

作者「35点ですけど…？」

政宗「作者…」

第二回目（前書き）

次回の話から1巻に入ります。

Aクラスは霧島、優子、工藤、久保、政宗、オリキャラの6人でAクラスの日常を書こうと思っています。

今回は、政宗の家族もだしたのでプロフィールも追々載せます。

それでは、第二回目です。

第二問目

政宗 side

「優子。この学校で一番頭がいい男子って誰だ?」

「久保君じゃないかな? 確か学年3位だったと思つ」

振り分け試験でクラスが変わるので、2年生になつた時に確実にAクラス入りの人と親しくなりたいと思つてゐる。

「とりあえず、友達作りたいんだよ。俺は」

「政宗はAクラスに入るの?」

「ダメか?」

「ううん、政宗がいるなら心強いわ」

Aクラスなら優子もいるし、設備もいいからな。振り分け試験の時は眞面目にやるひつと思つてゐる。

「悪いんだけど、久保のクラスを教えてくれ」

「アタシと同じクラスだから、着いてきて」

振り分け試験まで残り数日。友達作りに必死な俺。……別に人見知りとかではない、親父のせいで友達が少なかつたのが原因だ!

「久保君。ちょっとといいかな？」

「ん？ああ、木下さんか。別に構わないよ」

久保利光。眼鏡をかけて頭脳明晰というオーラが漂っている。話しが穩やかでいい人だなと思っていると久保と目が合った。

「君は転入生の倉石君だね？初めまして、僕は久保利光です」「初めまして、倉石政宗です。優……木下とは幼なじみです」「……何で言い直したの」

顔もかっこいいし、性格もいい。学力なら男子1位。すごいな……やつぱり1人はいるんだな、完璧な人っていうのが。

「で、倉石君は僕に何か用かな？」

「あの、そのことなんだけれど、政宗は友達が欲しいのよ。」

何かそう言わると恥ずかしくなつてくる。

「倉石君、僕で良ければ友達になるよ
「いいのか！？ありがとう！久保！！」

男子の友達がいなのは、（秀吉は幼なじみ）辛いので、本当に助かる。

「政宗も久保君も他人行儀な呼び方ね。友達になつたなら下で呼び合えばいいじゃない」

「…………」

出会つて10分もしないのに「利光」って呼ぶのか！？

「……政宗……君？」

「お、おお……な、何だ？利光」

「『がい』じゃないわね！？」

仕方ないだろ！？明久や雄一はダウトをやつた仲だけ俺たちはまだ会話しかしてないんだぞ！？

「倉……政宗君。君はアメリカ帰りなんだよね？僕に英語を教えてくれないかな？」

「ああ、分かった。ちょっと教科書を見してくれ」

友達を作る。下の名前で呼び合つ。友達に勉強を教える。これが普通の高校生なんだな……としみじみ思った。

「……………君？……………政宗君！？」

「……………！？あ…ああ、『ごめん』

「政宗？大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

昔のことは忘れよう、とは思つてゐるんだが、俺はトラウマをずっと引きずつてゐる。

「じゃあ、アタシは行くわね」

「ああ、じゃあな優子。でだな、利光。ここに用いるのは……」

この後、5時半頃に俺は「そろそろ帰る時間だから」と言って利光と別れた。

雄一 side

今の状況を整理しよう。

泣きそうな少し顔が幼い少女が1人。

冷静に対象しようとする幼なじみが1人（翔子）。

目を潰され地面にのたれうち回る男が1人（俺）。

泣きそうな少女に出会って話そつとした瞬間、翔子に目潰しをされてしまったのだ。

「……で、そのお兄ちゃんの特徴は？」

「……黒色の髪に碧い目です、身長はこの倒れてるお兄さんよりも下くらい」

「その前に俺にツツコんでくれ……」

謎の少女も翔子も路上でのたれうち回ひの俺を疑問に思わないのか…？

「んで……え～っと」

「あ、私は漣つていいます。レンと呼んでください」

「……なら、レン。その人の家に行こう

とりあえず状況整理。

翔子と帰る（無理矢理帰らされたる）途中、途方に暮れる少女発見。

「どうした？」と俺

「ブスッ

「目があ———！？」

お兄ちゃんがいつも（日本）に帰つて来てレンも高校生になつたからいつちで暮りあらしき

そんで、迷子になつてゐるらしい

「でも翔子。手がかりが少ないだろ？ そのお兄ちゃんの携帯番号とか知らないのか？」

「分からないです……」

レンが少し泣きそうになる。仕方ないが、名前を聞いて適当に俺が持つてるメアド全員に「こいつを知ってるか？」と聞いたほうがいいか？

「レン。そのお兄ちゃんの名前は？」

「…………名前ですか？ 政宗つていいます。政治の政に宗教の宗で、政宗です」

「「…………」

「政宗つて名前はたぶん、アイツしかいないし、特徴も……ぴつたりだ……。」

「おこレン。もしかしてレンの名前は倉石じゅないか？」

.....あれ？知っているんですか！？」

「私たちの学校の転人生」

一本当ですか！？

政宗の妹か？髪は金髪だが、目の色は確かに同じ色……だな？

「あつあの / / /」

雄一見（めぢやタメ（アヌツ）」

本田、2度目の田瀬し。何で理不尽だ！俺はまだ誰とも付き合ってないからいいだろ！？しかも確かめただけだ！

「……雄一。政宗の電話番号わかる?」「

ああ、見えれば

正直、視界が回復してないので携帯がどこにあるか分からぬ。

「バツクの中だ。取ってくれ」

- 1 -

翔子から携帯を受け取る。電話帳を見てみると（ほやけてこなが）「倉石政宗」とあったので、電話をかけてみる。

P
r
r
r
r
r

一

「もし」「いや」「いや! ? 雄」「いやー。」か! ? 今、ちがう「いやー。」

- - !

ツーツーツー

……猫？

「……どうだつた？」

「すまない、猫の鳴き声で全然聞こえなかつた」

「お兄ちゃんは、捨て猫をよく拾つのだたぶん、そのせいだと思います」

政宗の意外な面を見た。最後の「だから飯はこつちだあ――――――！」と言つてゐつことは、えさをあげているのだひつ。

「お兄ちゃんは子供の頃からです。すくべ猫に懐かれやすくて……」「下手すれば10匹はいるぞ」

「……意外」

さて、政宗が餌をあげ終わるのを待つか。

Pr rr rr rr

「お？政宗だ。もしもし？」

「雄二か？悪いな。ちょっと猫に餌をやつていた」

「まあ、そんなことより、政宗の妹と一緒にいるんだが家が分から
ないんだ。迎えに来てくれ」

「……レンか？電話変わつてくれ」

「わかつた。レン、政宗が変わつてくれつて
「はい！もしもし」

レンはすくべ嬉しそうだ。これで解決したかな？

「……雄一、聞きたいことがある」

「何だ？」

翔子が俺のバックの中からあるものを取り出す。

「……この本は何？」

「ハツハツハツ。ナンダコノホン?ハジメテミタゾ?」

「……歯を食い縛つて」

「違う!……これは明久から預かつてるんだ!……破らないでくれ!……しかも翔子には関係ないだろ!？」

翔子の背中から黒いオーラ(殺氣)が漂う。ヤバいな、下手したら俺の聖書(口口本)が……!!

「吉井の?」

「ああ、本当だ。『鉄人に呼ばれたから預かつてくれ』と言われたんだ」

苦しい嘘をつくが騙しきるしかない。明久の本なら破るのも気が引けるはずだ。

「……なら、幼なじみとして雄一に(ブスツ)」

「つぎやああー!ー?」

恨みが!…恨みが!…もってダメージが半端ねえ!…ちくしょい!…
!…で俺は聖書(口口本)を守るために失明してしまったのか?…?

「ありがとう!…ぞこます。家がわかりました!」

「……そう、よかったです」

どうやら政宗の家がわかつたらしい。転入したばかりだから俺も政宗の家は知らない。

「文月学園の近くのマンションの向かいがわらしいです
「明久が住んでるマンションのところだな。よかつたな
「ありがとうございました！」

レンはそう言って走りだした。

……文月学園と逆の方向に。

「……方向音痴」

「翔子。スマン、これを俺の家に持つて行ってくれ。俺はレンを追いかける」

俺はレンの走った方向に全速力で向かった。方向音痴な上に気弱な性格。夜になつたらマズいからな。

「……この本はお義母さんに聞いてみよう

後ろから聞こえた独り言に「俺の聖書（エロ本）、生きて帰つてこい」と願つた。

「レン……」

「あれ、大きいお兄さん?」

「坂本雄一だ」

5分位走つただろつか?路地裏とかを通つたため追いつくのに時間がかかった。

「レン、そのマンションってのは恐らく逆方向だぞ」

「ええ!? そうなんですか!?」

「文月学園の近くのマンションはバカ……俺の友達が住んでいるんだ」

「すいません……わざわざ」

「いや、大丈夫だ。とりあえず政宗の家まで送るぞ?」

「あ……ありがとうございます……」

逆方向を向き、2人で明久のマンションを指す。言つまでもなく2人きりなので気まずい。

「あのわ」

「にや……にやんでひょうひや?//」

「落ち着け。躊躇すぎだぞ?」

「す……すいません……」

「レンは政宗と何歳差だ?」

一応、女子に年齢を聞くのは失礼といつのを考慮して遠回しに聞いてみることにした。

「1歳差です。今、受験生ですよ」

「…………」

「坂本さん？」

1歳差だと? いや待て落ち着け俺。確かにレンは幼い顔をしているから、小学生かと思っていた。

「スマン、顔を見ててつきり中1位かと」

「…………うう」

「おい! ?スマン! ! 見た目で判断してすいませんでした! !

小学生はさすがに失礼だと思ったから中1にしたが……泣かしてしまったようだ。翔子に見つかったら殺されるな。

「…………私つてそんなに幼く見えるんですか（グスッ）」

「ま…まあ、少しば。」

「…………身長伸びないかな」

「とりあえず涙拭け。周囲の目が俺に冷たい視線を送つてくるんだ」

金髪ロリ少女を泣かしてゐる男子高校生。これは変態と誤解されてもおかしくない状況だ。

「ありがとうございます……」

「悪かった。ちなみに高校はどこに行くんだ?」

「文月学園です。お兄ちゃんもそこですか」

まあ、だいたい予測はついていた。レンは正宗と仲がいいんだろうな。

「やついいえば、政宗は迎えに来れないのか？」

「お兄ちゃんは「来たばつかりだから家周辺しか分からんんだ。雄一に送つてもらえ」と言つてたんですが、雄一って誰かなつて？」

「翔子に呼ばれてただろ！？」

意外と明久並みかもしれないな。方向音痴のこともあるし。

「とりあえず着いたな。恐らく、この家だろ」

「！」ですか……」

レンが田を輝せて家を見ている。…………「」ここまで明久の家に近いのか。これはまた便利な逃げ場ができたな。

ピンポーン

「はーいよ。どちらをですか？」

「お兄ちゃん！！久しづり！！」

「レンか？久しづりだな」

レンが政宗に抱きついて会話している。…………言つちや悪いんだが、どうやらレンはブランパンひしこな。

「雄一。助かつたよ」

「ああ、気にするな。それより政宗。たまにここに泊まりに来ていいか？」

「俺はいいけど？」

「私もいいよ！坂本さんなら大歓迎だよ～」

俺もレンに懐かれてんのか？と思つたが、翔子にばれたらいろいろ面倒だ。

「じゃあ、俺は帰るやつ。」

「坂本やつーやつなりー。」

後ろから手を振る。「じゃああなた」と背中を向けて喋った。

「雄一と仲良いな? 惣れたのか?」

「……違つよお／＼／＼」

「顔にでてるからな? それより荷物を部屋に入れとくからな

「あつ、私も手伝つ!」

「雄一? 翔子ちゃんが「……」の本は雄一の?」って聞きたくてた
わよ?」

「あつとお袋の?」とだ。「ええ、そつと「みづ川」だとだ。ああ、
俺の聖書(H口本)は今頃燃えてるかもな。

政宗「なんで、妹が金髪ロリ少女なんだ？ は が ないでもパクつたか？」

レン「それは、私も疑問でした？」

作者「いや？俺の趣味だが？」

政宗、レン「…………」

作者「えっ？ 何その「うわ、コイツはロリで金髪でブランパンが好きなんだ」見たいな目をしているんだ」

雄一「そういうえばレンだけ、名前がカタカナ変換だよな？ それはどうなんだ？」

作者「漣 僕も最初は読めなかつた。理由はそれだけ」

政宗「俺が言つのはおかしいが、俺と島田や姫路は接点ないよな？」

作者「まあ、そうなるね」

政宗「まず、接点を作るのか？」

作者「当たり前だ。じゃないと「はじめまして」なんて言つのからやらなきゃいけないだろうが」

雄一「俺の聖書（H口本）は？」

作者「質問多いんだよー。宿題やらしてーーー生物ヤバいのーーー」

雄一「ちょっと待てよー。俺の聖書（H口本）はー？」

倉石漣（前書き）

政宗の妹の紹介です。

髪型が葉月とダブつてしまいますが、ちょっと低めのツインテール
と思ってください。

ブラコン設定は気にしないでいただけると嬉しいです。

では、オリキャラ紹介パート2です。

倉石漣

名前 倉石 漣

年齢 15歳

誕生日 7月16日

ルックス 幼い顔で金髪。目は政宗と同じ褐色。髪はツインテール。

性格 気弱で人思い

身長 148

体重 41

血液型 A型

得意科目 英語 数学

苦手科目 日本史 保健体育

好きなもの（こと） 政宗 子猫 甘いお菓子

嫌いなもの（こと） 幽霊やゾンビなどのオカルトもの

召喚獣 弓。近接でも攻撃可能になっている。弓矢の制限はなし。

腕輪の能力 光の弓。点数を半分使って、その教科で一回のみ（回復試験を受けければ再び使用可能）使える一撃死の弓矢。当たらなくとも点数消費。

倉石漣（後書き）

政宗「何を話せばいいんだ？妹のキャラ紹介にピッタリむんだ？」

作者「例えば「金髪ロリの妹だぜい・ひやつまお――――」とかノリよく話せよ

政宗「そこだけ聞くと俺が変態にしか聞こえないな」

レン「…………お兄ちゃん――――」

政宗「えー？ ちよつと待てー！ 何この展開ー？ ヤバイってー！」

作者「？」

作者「4話書かなきゃ…………」

政宗「スルーしないでえーーーー！」

レン「お兄ちゃんだったら…………別に…………構わないから――――」

政宗「やめてー！ 後書きなのに大変なことになつまつだら――――――！」

作者「ははっ」

第四問目（前書き）

今回から話が1巻になります。話は原作を崩さないようにします。

Aクラスのオリキャラや一年生のレンの友達のオリキャラも登場します。

政宗は暇があればFクラスと絡んでるので、基本的にFクラス6人 + Aクラス6人（たまに何人かいないが）と番外編をやって行こうと思います。

では、第四問目です。

第四問田

政宗 side

俺は文月学園へと向かっている。レンは俺よりも早く出かけた。その文月学園へと続く道は桜が咲き誇っている。

「……綺麗だな」

見とれてしまつほど綺麗だ……が。

「倉石か？少し聞きたいことがある」

「……ハア」

鉄人がいなければ。せっかく桜見て黄昏てたのに、筋肉の塊を見てさつきの気分がどつか飛んでしまったようだ。

「なぜ、俺を見てため息をつく？」

「……何でもないです」

「とりあえず、受け取れ」

「どもです」

振り分け試験の結果だ。Aクラスに入るようになんと頑張ったはずなのだ
が……。

『倉石政宗……Aクラス』

Aクラス。優子や利光がいるであろうクラス。本音を言つなら明久や雄一と一緒にがよかつたが、親父にうるそく言われるのはもう勘弁だ。

「お前の実力なら学年主席にもなれると田中先生から聞いていてな。手を抜いたのか？」

「ええ、そうですよ」

俺が学年主席になつてもクラスを引っ張つていけないのは田に見えている。

「……家庭事情か？」

鉄……西村先生にだけは、家庭事情を話した。話せば親身になつてくれるいい先生だと俺は思う。

「いや、ただ単に学年主席になつたら戦争の前線にでれないからですよ」

「そつか……」

俺の初めて自由な学園生活が幕を開けた。

「すげえな、これが教室かよ？」

ニアロンは一人一つ。リクライニングシート、観葉植物や絵画もある。……どこのホテルのロビーだよ、と言いたくなる。

「倉石君。お久しぶり」

「……工藤か」

工藤も△クラスか。正直、同性愛扱いされるから少し苦手意識を抱いてしまう。

「愛子、政宗。おはよ」

「おはよう、優子」

「うつす、優子。工藤と優子は友達だったのか？」

「うん。優子が学食のこととかを教えてるうちにね」

さすが優子だな。小さい頃から転入生に学校のことを教えてたな。優しいのに秀吉や俺には折檻するがな。

「そういえば学年主席って誰になつたんだ？」

「霧島さんじやないかな？1年の頃も学年主席だつたし」

「どの人だ？」

「あそここの席の人だよ」

その人は黒髪を肩まで伸ばした少女だった。可愛いと言つより綺麗という言葉が似合つような容姿だった。

「政宗君、おはよう」

「利光か、おはよ」

「……」

工藤に何か変な目で見られる。何だろうか？

「今からHRを始めます。席に着いてください」

Aクラスの担任は眼鏡をかけて髪型はお団子状にまとめた高橋先生。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの2年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願ひします」

話によれば先生の中で1番頭がいいとか。高橋女史とも呼ばれている。

「参考書や教科書や冷蔵庫の中身など、学園が全て支給をするので遠慮せずに申し出てください」

……ん？紅茶の香りが漂つてくる。後ろの男子生徒が紅茶を淹れているのか。

「では、はじめてクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

振り分け試験で誰よりも優秀な成績を収めた生徒。美人で秀才か……。

「……霧島翔子です。よろしくお願ひします」

そして、クラスを見渡す。なぜか同性の生徒に目が向けられていた。

「やつぱり同性愛者なのかな？」

「だつて、告白を全て断つたらしいからな」

とひそひそ話が聞こえてくる。それだけで同性愛者扱いは酷くないか？

「では、次から廊下側の席の人から自己紹介をやります」

このクラスの生徒、もとい戦友の自己紹介が始まる。転入生とはいえちゃんと自己紹介を考えておくか。

「佐藤美穂です。よろしくお願ひします」

次は俺か……席を立ち前にでる。

「倉石政宗です。転入生ですが試験戦争で足を引っ張らないよ」と頑張ります。よろしく

と笑顔で言い切った。すると、

「本当に男子か……？」

「政宗って名前は男子だろ……。しかし、可愛いな

迂闊だつた。変な噂が広がりませんよ」と……。

「神城早苗です。よろしくお願ひしますね」

「おおー、レベル高いぞあの子！」

一言で言つながら何つーか？銀色に女子らしい長い髪。それと普通にしてるだけなのに妙に色っぽい。その女の子で自己紹介は終わつた。

「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表にして協力

し合ひ、試召戦争で負けなことひよ」

試召戦争か……。すげえワクワクするな。秀吉や優子に会ひたために
転入したが、こんな副産物があるなんてな！

「君が転入生の倉石君ですね？」

「ん？ ああ、そうだけど？ ビリした神城？」

「あれ？ 覚えててくれたの？ ……嬉しいなあ」

顔を少し赤くして言ひ神城。 ……くつー？ めちゃくちゃ色々
るだろ！？

「ま、まあ、神城を見て男子が騒いでたからな」

「倉石君も……私に興味持つてくれた？」

身長差があるから覗き込むよひ聞いてくる。まあ、少しは持つて
るから否定ができない。

「神城さん。政宗君を困らせないほうがいいと想ひよ？」

「久保が言つなら仕方ないです」

「助かつたよ……利光」

正直、理性が危なかつたよ……。ソレにソレには少し慣れてない
んだ。

「……久保、倉石。聞きたいことがある」

「何だい？ 霧島さん？」

「得意科目を教えてほしい。試召戦争のために」

「何で俺らなんだ？」

「……学年2位と3位だから」

利光が2位で、俺が3位か？おかしい。久保より上の人には2人いて
その内1人は霧島。じゃあ、もう1人は？……なら試験を受けれ
なかつたとかでFクラスにいつたんじや？

「僕は現代国語かな」

「俺は英語と日本史、世界史だな」

Fクラスに学年次席がいるということか？なら、試召戦争が勃発す
るかもしだれないな。

「……そう、ありがとう」

「代表。ボクは保健体育（実技）が得意だよ」

「私も得意なのよ？特に実技がね」

「愛子、神城さん。張り合わないの」

「……試召戦争の時に助かる。ありがとう」

「何言つてんだよ。俺らは戦友だぜ？戦争を起こすんだぜええ！！！」

「政宗君！？キャラ変わったよ！？」

おつと。ついキャラが崩壊してしまった。気をつけないとな。

「俺の予想だが……Fクラスが試召戦争を始めるはずだな」

「まさか、振り分け試験が終わつた直後だよ？」

「甘いわ愛子、政宗の予想は……必ず当たるわよ？」

明久 side

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄一がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど
「やっぱり試召戦争をやる気か、明久」

政宗の声が聞こえた。それと政宗の後ろから女子が2人、こっちに歩いてくる。

「試召戦争を振り分け試験直後にするなんて無謀よ？」
「秀吉！？ついに自分の性別を理解したんだね！？」「明久、わし
はこっちじゃ」

秀吉の女子制服に感動する僕。Fクラスがこれで女子が2人か……。

「……吉井。何かすゞく失礼なことを言われた気がするんだけど？」
「気のせいだよ」
「アタシは秀吉の姉の優子よ」
「Fクラスの皆は楽しそうね」

聞いたことのない声だ？政宗の友達かな？

「はじまして、Aクラスの神城早苗です」
「俺もしつくか。Aクラスの倉石政宗だ」

神城さん！？めちゃくちゃ色っぽいなあ。サラリとした銀色の髪がまた美しいなあ。

「はじめまして！吉井明久です！」

「あら？君は観察処分者の吉井君？」

「明久。よかつたじゃないか？有名人になつてゐるぞ？」

女子に観察処分者と見られるのは少し悲しい。

「ふふつ。そういう人、私は嫌いじゃないわ？…………むしろ、美顔だから私のタイプかな？」

「明久に…………春が来たようだな」

「…………神城さんのタイプが僕の顔なんて！？

「吉井君にそ、そんな大人の女性は早すぎます！」

「そ、そうよ！吉井にはまだ早いわ！！」

「それなら私が教えるわ？吉井君。私があなたに大人の恋愛を教えるわよ？」

「…………よろしくお願ひします」

あんな妖艶な笑みされたら…………すいません、理性が保てません！

「素直ね 今から私が作ったお昼ご飯でもどう？」

「…………お供します」

もづ、神城さんの操り人形みたいになつちゃつた。でも、それで満足！！

「あんな色氣するいわよ……」

「明久。久しぶりにまともな飯が食えるじゃないか?」

確かにここは所水や塩しか食べて?ないからすぐ助かる。

「吉井君つてお毎ご飯を軽くすませる人なんですか?」

「んー?まあ、そうかな」

「嘘をつくな。飯代まで遊びに使い込んでるんだろうが

僕は一人暮らしなので、つい自由にお金を使つちやうんだよね。

「…………あの、良かつたら私があ弁当作つてしま jóうか?」

「え?」

もしかして、今日は神城さんのお弁当。明日は姫路さんのお弁当を食べられるつてこと!?

「…………いいの?本当に助かるよー。」

「良かつたじやない。吉井君」

「良かつたな。けじちゃんと毎飯食えよ…………」

木下さんと政宗から祝われる。他の人の手作り弁当を食べるのは初めて?なのかな?

「…………ふーん。瑞希つて随分優しいのね。吉井だけに作つてくるなんて」

「いや、でもいいんじやないか?明久の食生活なら

島田さんが面白くなさそうに口に對し、政宗がフオローしていく
れた。ありがとう政宗!――

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「俺はいいや。妹が作ってくれるからな

「む？政宗に妹がいるのは初耳だぞい」

「ずっと、アメリカにいたからな

政宗の妹……か。男の政宗で可愛いのに、妹ならなおさらうれしい。

「……弁当楽しみ」

「そうじやの」

6人分も作るのは大変なのに嫌な顔1つしない。なんてこんなに優しいんだろうか？

「ありがとう、姫路さん。今だから言つけど、僕、初めて会う前から君のこと好き「振られると弁当の話はなくなるぞ」……にしたいと思つてました」

フツ。失恋回避成功。さすがは僕だ。

「ねえ、政宗？欲望をカミングアウトした変態がいるんだけど？」

「ふふふ。吉井君は攻めなのですね？美顔ながら攻めとは……ますます興味が湧きました」

「大丈夫だ。ここに攻めとかで妄想してるアウトなやつがいるから」

恨むぞ僕の判断力。

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな

「確かに」

「だつて……お弁当が……」

「これも生きる為の行動。全て貧乏が悪いんだ！」

「政宗、木下、神城。悪いんだが席を外してもらえないか?試合戦争の話をするからな」

「Dクラスなら別にかまわないのでは?」

「俺らの最終目標はAクラスだからな」

雄一の言つとおり僕らの作戦やら考えがAクラスの人にはられるのは避けたい。ましてや、頭が切れる政宗もいるから仕方ない。

「神城、ここは帰ろ!明久と一緒に弁当食べれないからつてふてくされるな」

「……仕方ありませんね。では吉井君、また今度お昼ご飯を食べましょう」

そつ言つて神城さんは政宗を追いかけてDクラスだけの面子になつた。

「…………悔れない」

「どうした?ムツツリー!」

そつ言つて僕らに見せたのは、小型盗聴器だった。

「政宗のやつか?」

「…………場所的に不可能」

「じゃあ、一体誰が…………」

「まあいい。とりあえずDクラスとの作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕らは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

「やられましたね……」

「どうしたの、神城さん?」

「吉井君に仕掛けた盗聴器がばれてしまったようですね」

「……」

「……」

「……」

レン side

「可愛いね? ビジ中なの?」

「いや……私は」

「アメリカ帰りなんてかつ……いいな~」

「あの、好きな男性のタイプは?」

「……／／／」

「つおおおー! 照れてるのも可愛いー! 倉石さんー!」

……………どうしよう…私はこいつのが少し苦手なんだよ。それでも好きな男性のタイプって言わわれても………」

「困ってるみたいだな。倉石さんは彼氏はいるの？」

「い…いないですよう…」

「もー…！恥ずかしそうよ…」

「フリーだと…？倉石さん…！俺と付き合つてくれ…」

「何…？抜け駆けするな…！俺と付き合つてくれ…！」

告白されてるの…？私…？困ったな…。

「…」

「…」
「…」
「…」
「…」

近くの席の榎本さんと世崎さんが男子を追い払っている。正直助かります。

「レンちゃん、大丈夫？」「全く！突然に告白とかデリカシーがないのかよ…？」

心配気味に声をかけてくれる榎本さんと、男子を少し罵倒する世崎さん。この2人は席が近くで話していたので、仲良くなりました。

「ありがとう、榎本さん、世崎さん」

「じゃあ、お詫びに聞かせてよ………本当は誰が好きなの？」

「そいつは俺も気になるな」

わあ！？榎本さんと世崎さんも乗っちゃったよ！？ちなみに俺って
言つてるのは世崎さん（女）だよ！？

「……いぬにはいぬなんだけどお／＼／＼

「…本川なの（かる）…」

「……………先輩は僕になる人かいるんだけどお

「何か接点があつたのか？」

「うん……お兄ちゃんの友達なんだけれど、

卷之三

あの後からお兄ちゃんが坂本さんに好意があると私に言つてきて気付いた。そう考えると……恥ずかしい//

「むー?」これは本気で恋してますねえー?

「聞いたからには手伝うぜ？」

ええー!? 榎本さんも世崎さんもノリノリだあ!? それは嬉しいんだ
けど.....。

「でも、彼女がいるかも…… しれないの」「どういうこと?」

私が初めて坂本さんに会った時、私の話を聞いてくれた女性。坂本さんは「翔子」って言つてた。彼女かな?と悩んでいたのだけど。

「そいつはやつかいだな」

「むー？恋のライバルですか……」

「私と坂本さんは学年違うし、その彼女の人はめちゃくちゃ美人だった……」

自信が無くなつてきちゃいました……。

「うわ！？レンちゃんがショボーンモードに入りました！？」

「お～い、しつかりしろ」

むう……坂本さんにじつやつたら近付けるんでしょ？

「あいや～」りやダメだね

「完全にフリーズしてやがるな」

でも、1学年の私が2学年の教室に行くのもなあ……。お兄ちゃんに会いに行くつてことを名目にすれば……。

「レンー起きてーーーお密さんだよーーー
「えつ……？」

教室のドアのほうを見ると、片手に弁当箱を持つていて女子に言い寄られてくるお兄ちゃんがいた。

「どうしたの？？」

「レンか？すまんちょっとじぶんくれ

女子を避けながらひっしきへ来るお兄ちゃん。どうしたんだろ？

「これ、レンの弁当箱だろ？俺のはたぶんレンの持つてる弁当箱の

「ま、ひだと思ひんだが

「えつ！？」

お弁当箱を確認するそこにはお兄ちゃん用に綺麗に詰めたお弁当だった。朝にあわてて間違ったのかも。

「めんね

「いや大丈夫だ。それといいのか？毎日弁当作るなんて無理しなくていいけどよ」

一緒にいる時間が少なかつたからお兄ちゃんが自由な時間位妹として生きたいなあと思っている。

「悪いな、レン。たまには俺も作るから頼んでいいか?」

お兄ちゃんは朝に弱いのを知っているのは私だけだと思つ。兄妹だけの秘密? といつのが少し嬉しい。

「じゃあ、午後からやしないとなるからな

「ん！ いやあね！！」

手を振つてお兄ちゃんを見送る。

「…………レンちゃん~今のが…………せつも言つてた先輩?」

「えつー？ち
違つ
／／／
「

うわあ！？勘違いされてる！？今のはお兄ちゃんだよ！？

「今のが倉石さんの彼氏か……」

「わすがだな倉石さんの彼氏。イケメンだし、料理もできるのか…

…

「イケメンと云つより美顔だよな」

誤解が広がります！？弁明したことあります！？

「畠さん……聞いてください」

「？」

あまり声を出すのは得意じゃないんですよ。

「今のは……私のお兄ちゃんなんです！？／＼／＼

「／＼／＼……何だとおー！？」

男子生徒が驚いてる？何でしょつか！？

「俺、ちよつとお義兄さんに話が……」

「俺のほうが先だ！？」

と男子生徒が半数位教室を出てこっちゃいました。お兄ちゃんに話つて何でしょつか？

「……ブランか」

「……だな」

榎本さんと世崎さんが何を言つているのかよく分からなかつた。

第四回（後書き）

政宗「オリキャラだな」

早苗「少し小暮先輩にキャラがかぶつてるのは気のせいですか？」

作者「まあ、Aクラスでかぶらないキャラはほんの感じだからな」

世崎「何か……完全に男キャラだよな、俺」

作者「秀吉と逆ポジションだな」

榎本「私は、どんなキャラなんですか？」

作者「少しのほほんだが、意外としつかり者って感じかな？」

榎本「むー？プロフィール書いてくださいよ」

作者「お前らはまだ名前がでてないからな。ついかよ政宗に任してんのに、俺への質問コーナーになつてんだろ？が」

政宗「知らん」

作者「ちひつ。まあ追々プロフィール書くわ。神城だけだが」

神城早苗（前書き）

エンゼルです。

プロフィールが少々ずれるかもしないので後から直すかもしれません
いです。

神城早苗のプロフィールですが、秘密な部分もあるので、そこはス
ルーということです。

では、プロフィール紹介です

神城早苗

名前 神城早苗

年齢 16歳

誕生日 3月5日

ルックス 銀色で肩までの長さの髪。色気がなぜか強い。目の色が紅色。

性格 能天気 いたずら好き

身長 160

体重 () :

血液型 O型

得意科目 保健体育（柔技） 数学

苦手科目 物理

好きなもの（こと） いたずら ポーハー 素直な男子

嫌いなもの（こと） 理不尽 態度が悪い男子

召喚獣 素手に見えて暗器を持っている。糸、針、鎌などが主な武器。

腕輪の能力 ネタバレなのでまだ公開しません。もしかしたら気付く人もいるかもしません。

神城早苗（後書き）

レン「何で私は体重が載ってるんですか――?」

作者「『めん』『めん』。そういえば女子のプロフィールに年齢やら体重書くの失礼だねってさっき気付いたんだ」

早苗「なぜ私の召喚獣が暗器なのでしょうか?」

作者「俺の中のイメージだから気にしないで」

政宗「そういえばレンは『』だよな?」

作者「だつて1学年だから召喚獣の腕輪の能力使わないだろと思つたからな」

レン「金髪に『』より西洋の……ボウガンとかのほうが……」

政宗「やめとけ。作者の趣味だろ?」

作者「違うわ!だつてよ皆は剣とか斧じやんか。遠距離武器があつたつていいだろ?」

政宗「まあな

早苗「暗器に毒針とかないでしょ?吉井君の召喚獣に……」

作者「…………そつきたか」

第五題目（前書き）

どうも、ハンゼルです。

初の感想をいただきました。本当にありがとうございました。
今回は1巻のロクラス戦の途中までです。

前書きをあんまり書くことないね。

では、第五問目です。

政宗 side

「ほらな？工藤。予想どおり試召戦争を始めただろ？」

「FクラスがDクラスに勝てるわけがないよ？」

そこは雄一の作戦によつて変わるけれど、「神童」と呼ばれてるなら大丈夫だろう。

「まあ、簡単に言つなら本来、このクラスにいるべき人がいるからな」

「姫路さんのことかい？」

利光は分かつてるようだ。話によれば高熱で倒れて途中退席になり、Fクラスに入つたらしい。

「つまり、その人でDクラスの代表を倒すつてこと？」

「まあ、そうだろうな」

「FクラスとDクラスの試召戦争なのに、元々Aクラス入り確実の人に頼つて勝つなんて、あんまり気分が良くないわね」

優子が少し不機嫌そうに言つ。まあ、そりやそうかもしれないが……

……、

「優子、甘いぜ？ 何もFクラスは姫路だけじゃない」「どういふこと？」

特に俺らが会つたあの6人。皆、危険だな。

「俺らがもつとも注意しなきゃいけないのは……Fクラスかもしない」

「政宗が言つなら……そつなかもしれないわね……」

優子が「ありえない」と言わんばかりの顔をしているが俺の考えに納得したようだ。

「なら、試召戦争の様子でも見るか？」

「でも政宗君、そろそろ授業が始まる時間だよ？」

「大丈夫だ。先生はDクラスに連れていかれるから」

化学教師の五十嵐先生が担当なのが試召戦争に巻き込まれるだろう。DクラスはFクラスを侮っている。一気に片をつける作戦をするだらうからな。

「……プラズマディスプレイで見る?
「代表、いいのか?」

「ぐん、と頷く代表こと霧島がプラズマディスプレイで試召戦争を見ることを許可してくれた。

「じゃあ、そうしようよー」

「アタシも政宗の予想どおりになるか見てみたいわ」

工藤や優子も賛成する。見てて損はないだらうしな。代表がプラズマディスプレイの電源を……、

「代表?違うわよ、それは録音ボタンよ?」

「電源ボタンはこっちだよ、霧島さん」

「……」めん

機械音痴なのだろうか？意外と言えれば意外だな。まあ、レンの方向音痴よりはマシかな？

「Dクラスが有利か……」

「Fクラスは防戦一方つて感じね」

「防戦一方と言うより時間稼ぎつて感じだな」

世界史の田中先生は採点が甘い。その分点数が上るので試験戦争の時間稼ぎには有利である。誰からその情報を聞いたかつて？それを聞くのは野暮つてものだぞ

「姫路さんの補充試験を終えるのを待つてるのでしょうか？」

「姫路が振り分け試験を途中退席したからな、全教科〇点だろ」

神城が話に入つてくる。神城の言つとおり時間稼ぎして姫路で決めるんだろう。まあ、Dクラスとの戦いよりも俺らAクラスとの戦いに作戦を用いるだろうな。

「俺、直接見てくる。先生来たら眞面目いから保健室行つたとか言つといて」

「全く、政宗は適当ね……」

「そんなの昔からだる」

俺はガラッと扉を開け、Aクラスを後にした。すると放送の音が聞こえた。

『吉井明久君が生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそいつです』

……分からぬが、この放送を聞いて何となくFクラスの勝利を確信した。

Dクラスの部隊の近くに着いたが、念のために隠れている。試召戦争では、他のクラスが干渉するのは禁止だからな。

「つと……」

Dクラスの人と田が合いそうになる。Fクラスなら面識はあるし、見学ということなら干渉は無いだろ？が、Dクラスとは面識がない。Fクラスと間違えられて試召戦争に巻き込まれれば、処罰されかねない。

「仕方ない。2階を通るか」

そう考え下への階段に行こうとするとい

「あなたは何クラス？」

「つー？」

ヤバッ！？ばれちゃったか！？女の子の声。恐るべしつゝ田が合いそうになつた人なはず。ここは保健室で乗り切るか……。

「Aクラスの倉石政宗です。少し具合悪くて保健室に行こうかと…

…

「大丈夫？少し顔色悪いよ？」

昔、秀吉に「具合が悪い人」の演技を教えてもらつてゐるからある程度これで騙せるはずだ。

「はい。大丈夫です」

「保健室まで送るよ？」

「お気持ちは嬉しいです。でも、試召戦争中なので……」

「これでどうだ！？試召戦争を頑張れと遠回しに言えれば納得するだろ

…

「ううん、大丈夫」

なんてこいつたい。Dクラス放つておいてAクラスの俺を助けるなんて、優しい女子だな。

「ありがとうございます。名前を聞いていい？」

「うん、玉野美紀だよ！よろしくマサちゃん」

ん？何か聞き覚えのない呼ばれ方をしたな？

「マサ……ちゃん？」

「ふふっ。マサちゃん……。保健室で着せ替えてあげるからね…

…

ダツ！俺、猛ダツシユ

ん？具合悪い？そんなの知らねえよ……まだ処罰のほうがマシだ……

「マサちやん……具合悪いんでしょ……無理しちゃダメだよ……」

「人間は命の危険を感じると覚醒するんだよ……」

「命の危険……セコまで具合が悪いの……？」

何で追っかけてくるんだよ……試合戦争しろよ……？

「ロクラス！助けてくれええ……！」

俺の必死な叫びは試合戦争で忙しいロクラスには届かなかつたようだ。

優子 side

「そんなの昔からだる」

政宗はそう言ってAクラスを出た。「昔から」という言葉に少し安心する。あんなことがあった過去のことは捨ててないみたいだったから……。

「昔から……つてことは倉石君と優子さんは幼なじみなのですね？」

「う、うん

神城さんはアタシのことを「優子ちゃん」と言った。私も「早苗」って呼んだほうがいいのかな?

「……早苗でいいですよ?」

「アタシ達は幼稚園からの幼なじみなの。早苗」

アタシの心を見透かしたようにアコの名前で呼ぶことを許可してくれた。

「幼稚園からですか……小さい頃の倉石君を見てみたいですね」

「小さい頃の……政宗か……」

懐かしい。まだ小さい頃の政宗はお父さんと可愛がられてた。政宗もお父さんが好きだったのにね……。

「小学校の時はモテたんじゃないですか?」

「政宗は男女問わず人気があったのよ。告白も何回かされてるのを見たわ」

「ふーん? それで優子は少し嫉妬しちゃったのカナ?」

「つー?」

政宗に嫉妬なんてしないわよーと諒おうとしたナビローリもいつしかつ。

「図星……ですかね?」

「優子? 顔に出でるよ?」

「う……違うわよー」

早苗と愛子が一や一やしながら聞いてくる。既定しないこと噂が広がつたりやつるもの！

「でも、転入の時に倉石君と話したけど、「幼なじみの」とを好きつて言つてたよ？」

「つー？／＼／＼

そんな！？政宗がそんなことを…？ダメだ……もつアタシの顔が真つ赤なのは見なくてもわかるわ……。

「……優子は倉石の」とを好きなの？」

代表も話に入つてくるなんて…？いや、好きだけれど「友達」としてよ…？

「政宗は恋愛に鈍い」ところがあるのよ……」

「なるほど……何となく分かりますわ」

早苗は薄々だが気付いてるようだった。どうして頭が切れるのに鈍いのかしら？

「……雄一も鈍いところがある」

「代表？雄一って……？坂本君の」と…」

「……うん

坂本君つて言えればFクラスの代表だったはず。代表は坂本君の」とが好きなのかな？そういうとえば代表の噂は同性愛だったような？

「いいなー。好きな人がいるって」

「私には興味のある男性はいるのですがね」

愛子と早苗は話からして好きな人がいないそうだ。……いや？アタシもいないわよ？あくまでも友達としてだからね！

「男子の僕がこういう話に入るのはまずいかな？」

「私は構いませんが」

「いや、アタシもいいんだけど」

そういうえば久保君は好きな人はいないのかな？

「久保には好きな方はいらっしゃらないのですか？」

早苗がストレートに聞いてくる。アタシ的にやつぱりクールな男子×少しあどけなさが残ってる男の子がいいわね。そして久保君の一人称を「俺」にしたら完璧ね！！でもあえてあどけなさが残ってる男の子が攻めという考え方……！

「優子の目が何か輝いてるのはボクの気のせいかな？」

「相当、久保の好きな人に興味があるんでしょうね」

「木下さん、悪いんだけど期待に応えれない」

「えつ？期待？」

少し妄想してたら話がよく分かなくなつていた。アタシは久保君の何に期待してたんだろう？

「僕の好きな人はFクラスにいるんだ」

「そう……なんだ」

何でアタシは久保君の好きな人に興味を持っているのよ！？でも、取り乱せばボロが出てしまうので、適当な答えを話

す。

「Fクラスの女子なら、姫路さんや島田さん、木下君位だよね？」

「いや、その3人じゃないよ」

久保君のカミングアウト。どうやら同性愛者ようだわ。周りの人はどう反応するんだろ？

「へえ～ そうなんだ」

「……いつでも相談に乗る」

「ありがとう、皆」

何か反応薄っ！？近くに同性愛者がいたら普通ビックリしない！？

「早苗、何でこんなに蒼の反応が薄いの？」

久保君の反応に顔色を変えない早苗に聞いてみる。

「……きっとこれが普通なんでしょう。私たちの学年は

「普通……なのかな？」

「振り分け試験の直後に試合戦争を起こすFクラスは普通ですか？」

「うーん……」

「学園初の観察処分者、私の仕掛けた盗聴器をすぐに見破るムツリ君、誰もが女子に見間違える男子。普通ですか？」

吉井君、土屋君、秀吉のことを言ひてゐるよね？確かにアタシらの学年は普通じゃないのかな……。

「だから、同性愛が普通に見えるのでしょうか……が」「が？」

少し早苗の声のトーンが下がる。何だろう？

「同性愛はある意味正常なのです。異性が信じられない人、元々同性が好きという考え方の人、極端に同性にモテる人、様々です」

「秀吉はそうなつちやうのかな……」

秀吉は同性に異常にモテる。元々顔がアタシとそっくりなので女の子の顔みたい。なのに、モテるのは秀吉って少し嫌になる。

「そうなるかもしません。木下君は男子にしてはもつたいない顔をしますから」

「……確かにね」

早苗が少し笑う。異常だわ……この学年は。異常だから楽しいのかしら？全く……問題児がいるのに楽しいなんてアタシはどうかしてるわ

「私は今が楽しいですから普通や異常なんて関係ありませんよ」

「そうね……そうよね……！」

普通や異常なんて関係ないわ。今が楽しい！それだけでアタシは満足だわ。

「……ただいま」

「政宗？おかえ……り？」

そこにはメイド服姿の政宗がいた。皆が釘付けになっている。アタシも見とれてしまつほど可愛い……。

「優子、頼む折檻はやめてくれ。この格好でされたら俺は大切なものを失う気がするんだ」

「手遅れよ?」

ただし、この異常だけは許すことが出来なかった。

第五回（後書き）

作者「政宗？」

政宗「…………」

作者「政宗？」

政宗「…………おい」

作者「ん？」

政宗、作者「何で俺がメイド服を着てんだよーーー！」

作者「つて言いたいんだろ？」

政宗「ちくしょう。作者だからってセリフを自由にいじれるなんて
ずりい！」

作者「正直、その世界じゃ俺は神みたいなものだからな」

政宗「うわー！」こつ自分で自分のことを神（笑）つて言こやがつ
た！？」

作者「この世界で俺に逆らつたことを後悔させてやるよーーー！」

政宗「ん？「おーーー何で俺の服がメイド服にーー？」

作者「必殺、台詞加想！！」

政宗「いらっしゃいませ、ご主人様（うわ！？ちくしょう、喋れな
い！！）」

作者「ほら、読者に挨拶しろよ、マサちゃん？」

政宗「またお読み下さいませ、ご主人様（覚えてろよ……）」

第六問田（前書き）

エンゼルです。

テスト週間に入るので更新のペースが遅くなるかもしません。

レンの友達のキャラのプロフィールは後々になります。

では、第六問田です。

明久 side

Dクラス代表 平賀源一 討死

『うおおーーーつ！』

僕らはDクラスに勝つたんだ！それによつて歓声があがる。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「坂本雄一サマサマだな！」

Dクラスの勝利は雄一と姫路さんのおかげだろつ。でも、その裏側で僕の貞操が大変なことになりかけたんだよ？

「坂本、お客さんだぞ」

「ん？ 入つていいぞ」

「失礼します……」

少し気まずそうに入つてきたのは、金髪でツインテールの女の子だつた。けど、僕らの学年ではなさそうだね？

「坂本さん、ちょっといいですか？」

「ん？ 別に構わないが。明久、次の作戦を言つといてくれ

雄一が謎の少女に呼ばれ、教室を出る。仕方ない、作戦について喋らないとねー！

「皆、今は次の試合戦争よりもやることがあるんじゃないかな？」

「どうしたのじゃ？ 明久」

秀吉は僕らの作戦には気付いていないみたいだ。そう、僕らは……

…、

「今は……雄一をビッグロテスクに殺るかだ」

「「「了解！」」」

僕らは金髪でツインテールの美少女を誑かしての雄一を放つておくわけにもいかないんだ！

「何が了解！…じゃ！…そしてFクラスが何か武装集団になつてるのはじや！？」

FFF団といつ愛を捨て哀に生きる部隊さ。他人の幸せなんて潰してやるよ…！

「ああ、皆パーティーの始まりだ！」

「ハイハイハイ…！」

ああ、雄一早く来い！…そんな可愛いやうと会つた記憶」と抹消してやるよ…！

「何か」

「色々とっこわね…！」

FFF団の殺気に呆れる島田さんと姫路さん。構えていると足音が近づいてくる。……雄一。悪いんだけど君の命はここで終わる。

ガラツ！

「くたばれええつ！！雄一いいいー…………？」

「…………もう十分だ」

雄一はなぜかボロボロだった。スタンガンの後が残つてるのが地味に気になつたんだけどなぜだろ？

「…………まあ、気を取り直してだな。平賀、話を進めようか」

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

Dクラス代表の平賀君はヨタヨタと歩いてきた。

「悪いな、平賀。これも勝負なんでな」

「いや、謝ることはないさ。クラスを明け渡すのは明日でいいかな？」

勝てば雄一のように英雄扱いされるのに、負ければクラスの施設を落とされ3ヶ月間を過ごすことになるのか…………。

「いや、その必要はない。Dクラスの設備には一切手を出さないからな」

雄一は僕の予想してない返事をした。僕らの目標はAクラスだけど、普通の設備を手に入れるチャンスだ。

「俺達にありがたいのだが…………。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

……たぶんだけ雄一には考えがあるんだろう。「神童」と呼ばれているんだ。僕には雄一の考えについていけないけど。

「なに。そんな大したことじゃない。俺が指示したらアレを動かなくしてもらいたい」

雄一が指したのは、Dクラスの窓の外にあるHACONの室外機。ただしこれはDクラスではなくて……、

「Bクラスの室外機か」

「まあ、教師にある程度睨まれるかもしれないが」

この条件は平賀君にとつて悪くないはずだ。上手くやれば厳重注意で済むだろう。

「それはこちらにも嬉しいが……」

「次のBクラス戦で必要なんでな」

会話からして次はBクラスとの試召戦争だろう。Aクラスとの試召戦争のためなのかな？

「……そりそり。提案を呑ませて貰おう」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるように願っているよ」

平賀君はそう言つて教室を出た。

「さて、皆一今日は少し苦労だった！明日は補給試験だから休んでくれ！解散！」

雄一が号令をかけるとFクラスの皆は雑談を交えながら帰った。

源一 side

「と言うわけだから、クラスの設備交換はなしになった

ガヤガヤとFクラスの皆が騒ぐ。まあ、普通はあり得ないよな。

「室外機の件は追々説明するので、今日は解散だ」

代表というのも大変だな。負けてFクラスの設備になつていたら今頃どうなっていたんだろうか？だから坂本の提案は凄くありがたい。

「さて……俺も帰るか……」

試合戦争が終わって負けたけど、変わらない放課後になるはずだった。

「平賀。少しいいか？」

「……ん？君は転入生の……」

そこには転入生の倉石だった。Aクラスの人だから、面識は

全くない。

「今、時間空いてるかな？話が長くなりそうだ」

「いや、用事もないからいいぞ」

空き教室に連れられ俺は倉石と話をする事になった。

「まず、姫路の点数が何点なのか教えてほしい」

姫路さんの点数？それを知つて何の得になるんだろうか？いや、FクラスはAクラスに試験戦争をするつもりだから警戒してるのが？

「すまない、坂本から口止めをされていてな

だが、ここに情報を『えるのは坂本率いるFクラスは不利になるからな。倉石には悪いが答えないことにしてよ』。

「さすが雄一、ぬかりないな……」

「あの代表はかなり頭が切れるぜ？」

俺としてはFクラスに勝つてほしい。無理だとは思つがアイツらならやつてのけそうだ。

「340点だよな？」

「……………？」

倉石が突然そんなことを言つてめた。本当にさうか。……恐ろしい勘だな。

「その顔は惜しげといつよつな感じだな？まあ、姫路の現代国語ならこれくらいか」

「なあ？君は何者だよ？倉石」

「俺は普通の高校生だよ」

何が普通だ、と言いたくなるが気にしないでおけ。しかし、よく顔を見れば男女どちら付かずだな？

「まあ、ありがとう平賀。姫路は俺ら（Aクラス）の脅威だからね」「そりか？お前なら姫路でも相手できるだろ？」

きつとマイシも頭が切れるんだろうな。近々面白いことが起きそうだ。

「さあな？時間とりして悪いな。礼はまた今度するよ
「礼なんて別に……」

倉石は空き教室のドアを開けて外に出る間際、

「室外機にはこれを使つてくれ。これなら事故に見せれるからな

よく分からぬ機械を貰つ。何だらうか？

「じゃあな、平賀」

倉石は俺に背を向けて言った。倉石政宗か……。『イツもまた面白い奴だ。

レン side

「ねえねえレンちゃん、その坂本さんを見たいんだけど」「俺も見たいな。レンが惚れる位にカッコいい男なんだろう?」「そ… そただけどーーー」「

美琴と流衣に詰め寄られる。美琴が榎本さんで、流衣が世崎さんです。「私たち名前で呼んでよー」と言つので。

「しつかし、レンは本当に照れ屋さんだな? 顔が真つ赤だぞ?」「坂本さんのことを教えると送つてもうつた日のことを思つて出しちゃうんだよー!」

「初めて会つた日の話を聞きたいなあー? ねえー? レンちゃん?」「え? あのう?」

「坂本さんとの運命の出会いの話か、聞かしてくれよ? レン?」

美琴と流衣がニヤニヤと顔を近づけてくる。逃げようとしても流衣

が腕を掴んで逃げれない……。

「フツフツフツ。レンちゃん？諦めない」

「だつてえ……恥ずかしいんだよお／＼／＼」

「「倉石さん！めっちゃ可愛いーーーっす！ーーー」」

「死ね。お前ら」

流衣が男子を蹴り飛ばす。……流衣は本当に強いなあ。でも蹴られた男子が満足したような顔で倒れてるのが怖い。

「私が坂本さんに会ったのは私が日本に来たときで……」

私は坂本さんに会ったことを話した。私が坂本さんを好きなのは、きっと外見や性格がお兄ちゃんに似てることだ、と美琴と流衣に話した。すると、

「なるほど、確かに坂本さんは優しそうな人ね
「うんー！」

坂本さんは本当に優しい人なんだ 初対面の困っている私に声をかけ、最後は家まで送つてくれて……。

「レンちゃんの顔が輝いてるねー！坂本さんに会ってに行こーよーーー！」

「2学年の試合戦争が終わつたら行こうぜ？」

「え？……えええーーーあ……坂本さんに会って行くのーーー？」

坂本さんに会つたら絶対、テンパつちやうよ…………

「会つことが決まつただけでテンパるなよ…………

「だつてえ／＼／＼」

午後の授業は、坂本さんに会つたら何て言おつか考へるだけだつた。

「いよいよ、『J対面だな』

「レンちゃん……、言つちや悪いけど『J』はクラスだよね？」

「うううん」

お兄ちゃんに聞いたら坂本さんは「クラスだつて。『雄一』は頭はいいんだが、勉強してないからな。勿体ない」と言つていた。

「美琴は何言つてやがる。好きになるやつにクラスなんて関係ねえだろ」

流衣が美琴の頭に軽くチョップする。

「むー？ 確かにそつだけどチョップはないよ～」

美琴が頭をスリスリさせながら言つ。美琴も流衣も2学年の教室なのはしゃぎまくつてるね……。

「あの、あなたはこのクラスですか？」

「坂本さん用事があるので伝えてくれませんか？」

美琴と流衣がFクラスに入る人に声をかける。まだ心の準備ができないのに……／＼

「坂本、お客様だぞ」

「ん? 入つていいぞ」

「失礼します……」

美琴と流衣に背中を押されて教室に入る私。Fクラスの設備よりも坂本さんに目がいつてしまう。

「坂本さん、ちょっとといいですか?」

「ん? 別に構わないが。明久、次の作戦を言つといてくれ」

…。歯まずに言えて良かつたあ。歯んだら笑い者にされちやうよお…。教室を出て美琴と流衣に…。

「うわあ！？誰もいない！？」

「まあ、放課後だからな」

ど、どうしよう！？2人きりなんて絶対歯んだら笑うよー？…というか2人きりって何考えてるの私／＼

「あ…あの…えつとですね」

「顔が真っ赤だが、大丈夫か？」

「大丈夫できゅ」

「噛むなつて」

身長差があるので坂本さんが、私に顔を合わせるよつにする。それで田の前に坂本さんが…／＼／＼／＼

「いやー悪いなレン」

「レンちゃん。じめんね~トイレ行つてたのー。」

「……」で美琴と流衣が来てくれた。うう……見計らつて来たの……？

私はレンちゃんの友達の榎本美琴です。よろしく」

「お、おう。俺は阪本唯一だ。おう、

美琴や流衣が坂本さんと普通に話してる……。いいなあ、私は噛んじやうのに、／＼

「用事は何だ？」

「いや、どうしてもレンが『坂本さんに会いたい』と言つから……」「伝えたいことがあるとかでな」「レン。どうしたんだ？」

美琴も流衣も何言つてんのお！？／＼確かに会いたかつたけれど……つてそれより何て言えばいいの！？

.....

美琴や流衣がこっちを見てる。助けてよお。

「二、今度、家まで送つてきゆれた礼をするので！！／＼／＼」

どうせに思いついたことを喋り、私はここを走って逃げた。

「レン！」

「坂本さん、レンちゃんは照れ屋なので……それにつわぬでさよな
い。」

「……雄一」
「……俺はレンと話しただけだ」
「……なら、何でレンが泣いてるの？」
「いや、俺もよく分かつてない」
「……幼なじみとして、そういうことはいけないということを教え
てあげる」
「ちよつ！？待つてくれ！？翔子、誤解だ！？俺の話を『……えい
ぎやあああ——つ！？——』

後ろで坂本さんの叫びが聞こえたような気がした。

第六問田（後書き）

美琴「美琴かー？ 悪くないねー」

流衣「あえての流衣か？ まあ、これなら被んねえか」

作者「なあなあお前ら2人に聞きたいんだけど、レンのクラスメイトをもう1人増やすかなと」

美琴「男女どっち？」

流衣「いや、ここは女だろ」

レン「私は女子がいいです……」

作者「まあ、ここは女子かな」

美琴「華麗にスルーされたよ？ 私

源一「ていうか何で俺視点があんの？」

作者「気分で出した」

源一「酷えな。しかも一回も清水がいないし」

作者「はいはい、気にしたら負けだよ」

第七問田（前書き）

弁当事件の話です。後半はシリアス要素ありなので、注意です。

明日からテストで本当に面倒くさいですが、頑張って書きます。

では、第八問田です。

明久 side

「教室ではなくて屋上でも行くかの？」

「やつだね」

僕らは姫路さんの弁当を食べるため下クラスではなく屋上で食べることにした。

「明久ー。一緒に飯食べよう」

「政宗と神城さんに木下さんもお弁当？」

「ああ、今日の弁当は俺が作つたからな

政宗が手に持つてゐるお弁当を見せる。たゞが政宗だね。料理もできるなんていい嫁になりそつた。

「アタシらは政宗の料理の腕を確かめたいなーと思つてね」

「私は……昨日、吉井君とお昼を食べれなかつた分の、埋め合わせですね」

神城さんが近づいて来て囁いてくる。……相変わらず色っぽいなあ。今日は髪型がポニーテールで、僕のストレートだから昨日よりも可愛く見える。

「神城さんーー！あまり吉井君を誘惑しないでくださいーー！」

「そりやーー吉井には少し早いんだからーー！」

「吉井君はまだ誰の物でもありません。なので決める権利は吉井君にありますよ？」

「吉井君は誰を選ぶんですか！？」
「吉井君は誰を選びにかかる神城さん。うわー、めりめりく
ちや可憐こじやないか！？」

「吉井君は誰を選ぶんですか！？」
「あのれ……」「あのれ……」

男子が女子を選べ、つてまるで女子3人が僕を取り合っているみたい
いだ。でもよく考えたら……。

「お皿！」飯は皿で一緒に食べたほうが楽しいでしょ～。
「…………そうですね」
「…………そうよね」
「なり、一緒に食べましょ～吉井君？」

少し納得がいかないのか島田さんと姫路さんは複雑な顔をしていた。
何か間違つたことを言つただろうか？

「明久、屋上に行くよ」
「うん」

政宗に催促されたので、島田さんと姫路さんを連れて屋上に向かつ
ことにした。

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうだな、やはり屋上は晴れに限るな」

「あ、シーティあるんだよ」

卷之三

今、ここにいるのは僕、秀吉、ムツツリー、姫路さん、政宗、木下さん、神城さん。何てハーレムなメンバーだ！！

「まず俺の弁当が

「おお～！」

政宗の弁当に思わず声をあげてしまつ。冷凍食品ではなく手作りといつのが素晴らしいね！

「私は、あんまり自信ないんですけど……」

卷二

歓声をあげる僕と秀吉。ムツツリーも思わず声をあげている。

「じゃあ、食うか

Γ (Δ ≡ Δ)

あ、
うるさいぞ！」
——

二屋春
いかがわいはいにいわく

動きの素早いムツリー一がエビフライをつまみ取つた。そして、
流れるように口に運び……、

（パク）

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「　　」

政宗と秀吉の顔を見合せた。

「土屋君ー? 大丈夫ー?」

「わわわ、土屋君ー?」

木下さんと姫路さんがムツツリーに駆け寄る。秀吉と神城さんは呆然としていて、政宗は「そういうことか……」と呟いていた。

(政宗ー政宗ーー)

(えりした? 明久)

政宗は僕と田を合わせて余話をす。これができるのはいつもの4人と政宗だけである。

(姫路さんの弁当だよーー)

(ああ、恐らく中身が凄いことになつてゐるんだりつな)

(明久。お主、身体は頑丈か?)

(正直胃袋に自身はないよ)

びつしょいー。姫路さんに悪い気分をさせないためにも、今は食べべきわ。

(ならばこじはワシに任せてもらおつ)

(秀吉、やめておいたほうがいい。お前の胃袋の頑丈さは知つてゐが、それを遙かに越える絶望だぞ?)

(じやが……)

「おう、待たせたな！へー、こいつや問題ないやないか。どれどれ？」

「坂本君！！」

神城さんが止めに入るが時既に遅し。

パク バタン ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジューースの缶をぶちまけて倒れた。

「坂本君！？大丈夫！？」

「さ、坂本！？ちょっと、びしきしたのー？」

雄一が殺られたようだ。それと同時に政宗の顔が引きつる。…………

コイツは、本物だ……。雄一はゆっくり顔をあげ、

（毒を盛ったな？）

（毒じやない、姫路の実力だ）

政宗が雄一に目で状況を伝える。

「あ、足が……つってな」

「大丈夫か？優子、悪いんだが保健室に行つて湿布を取つてきてくれ

政宗は恐らく女子を兵器から遠ざける氣だらう。僕はまず島田さんをここから退場させよう。

「島田さん。その手につけてるあたりにね」

「ん？何？」

「さつさまで虫の死骸があつたよ」

嘘だけど。

「ええつーー? 叫んでるよー。」

「じんじん。とにかく手を洗つてきた方が良いよ」

馬を立て畠山へ 後は神坂さんたにと
から遠ざけることができるんだ！？

「大英圖書館」

「はい……」

ムッシニーにおこしこと語られた(?)ので既に自信満々に勧める姫路さん。

「あ、坂本君が転んでジュースが無いですね。私買つてきます」

これは神がくれたチャンスだろ？ 今なら神城さんを救える！ ！ そう考へてゐると姫路さんは屋上から出ていった。

ପାତା ୧୦୮

食いこなしたNII

「钛田さん……!! 伸成さん……!! お野子の業、うり田さん……!!

「そうだな。悪いがここは俺ら男子の出番だ！」

神城さんに兵器を食べさせないように必死な僕ら。ただし、神城さんは納得がいかないようだ。

「友達のピンチを見逃す」とは……

「神城殿。想像を絶する味じやぞ?」

「…………」

神城さんはためらっているようだ。そりやあ、僕だってためらっていの。けど……、

「神城さん」

「吉井君。何でしき?」

「僕は神城さんを危険な目に遭わせたくないんだ」

少し恥ずかしい台詞だけれど本心だ。男子が女子を守る、それだけだ。

「…………／＼」

神城さんが顔を反らす。まだ納得がいかないのかな?ビックリようか?

「…………神城さん、僕にも考えがあるんだ」

「…………」

「それはね…………」

弁当箱を持ち雄一のほうに歩み寄る。私情も入ってるけれどこの作戦をすれば皆が幸せを

「おひあつ!」「もじああつー?」

雄一?君は幸せ者だらう?なら少し位、地獄を見たつていいでしょ?

「ふう、これでよし」

「雄一、アーメン」

「お待たせいたしました、つてあれ？食べちゃったんですか？」

全部、雄一が食べたけどね。ここはあたかも僕らが食べたように振る舞わないと。

「お弁当美味しかったよ。『駄走様。雄一が凄い勢いで食べてたね』

「素晴らしい腕ですね」

「嬉しいですっ」

姫路さんは好印象だよ、雄一。好かれてる人にお弁当を作つて貰えるんだ。それ位の報いはしないとね

「お？ そうだ。そういうえば駅前に新しい喫茶店があつたな」

「あの店ですか？ 私もぜひ行ってみたいのですが…」

政宗と神城さんが話を逸らしている。この調子で『また作つてきますね』なんて言われたら雄一も保たないだろつ。

「あ、そうでした」

「ん？ どうしたのじゃ？」

姫路さんがポン、と手を打つたことに疑問を抱いている秀吉。

「実はですね デザートもあるんですよ」

「ああっ！ 姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！ 次はさすがに死ぬ！」

ちつー気付いていやがつたか……。

(やめろ明久。雄一が可哀相だ)

(でも、政宗！－！)

(でも、じゃない。)こは俺が行く)

(政宗が！？だつたら僕が逝くよ！－！)

(てめえ、俺を率先に犠牲したよな！？)

(簡単な話だ。俺が犠牲になつてお前らが生きる)

(カツコいい台詞だが、弁当に対してもうひとつカツコ悪い

(な)

(じゃあ、まず姫路をどかすか)

政宗がデザートを手に取る。そして顔を上げ、

「姫路。スプーンがないんだが……」

「あつ！すいません、教室に忘れちゃいました！取ってきますね」

姫路さんが再び屋上を出る。すると政宗がヨーグルト（兵器）を手に持つた。

「さて、食つか……」

「じめん。政宗」

「……すまん。恩に着る」

「倉石君……」

申し訳なさで俯きがちな僕らにフツと軽く笑いかけ、政宗は言った。

「そんな死地に赴く兵士みたいな顔すんなよ」

「……生きて帰つて來い」

「ああ、分かつて。いただきます」

容器を傾け、一気にかきこむ政宗。すると突然、政宗が険しい顔になる。

「 「 「政宗（倉石君）……」「」

僕らの呼び掛けに応えない政宗。また命という儂い花が散ったのか
…………？

「うぐあああっ！！」

「政宗！…！」

政宗は走って屋上を出ていった。その後、

バタン ガシャガシャン、ドサッ

という音と、

「政宗！…？政宗——っ！…！」

という慌てた木下さんの声が聞こえた。

「……雄一」

「……なんだ？」

「……さつきは無理矢理食べさせて「ゴメン」

「……わかつてもらえたならい」

「……倉石君は大丈夫でしょうか？」

「……あんな声の政宗は初めて聞いたぞい」

僕らは激しい毎食を犠牲者2名で終えた。

優子 side

「うぐあああ！？」

「政宗！？」

アタシは屋上に湿布を持っていく途中、政宗の叫び声と吉井君の慌てた声が聞こえた。その後に政宗は屋上の扉から出てきて、

バタン ガシャガシャン、ドサッ

階段の途中で気を失つて倒れる政宗。

「政宗！？政宗！？」

この時のアタシは人生の中で一番、動搖していたと思う。

「ぐ……ぐ……」

「政宗？」

政宗を保健室に連れていったのだが、打ち所が少し悪くて身体に傷を負っていた。

「あ……ああ、優子……か……？」

「ちょっと、本当に大丈夫？」

身体の傷よりも姫路さんの弁当（？）の方がダメージが大きいようだ。

「ぐ……ぐん」

政宗は頭を抑えながら立ち上がるがうつとするけど……、

「危ないわよ！政宗！」

「つとー！」

政宗が倒れそうになるのでアタシの方に引っ張ると、政宗はアタシの肩にもたれかかるよくなつた。……あれ？この状況はちょっとヤバくない？

「政宗ー！ちょっとーー！」

「ん……？」

政宗の目に生気が戻つてくる。今の状況は……、

1、政宗とアタシが抱き合ひてゐるような感じになつてこる。

2、政宗の田が虚ろで地味に色っぽい

3、隣にベッドがある

「アウトね。

「つまー? わ…悪い優子…! 気が付いたりよ…」

「政宗…まあ離れて」

「あ? ああ、悪い…」

政宗がアタシから離れてベッドに座る。政宗があそこまで取り乱すのも初めて見たわ……。

「今日の授業は休んだほうがいいんじゃないかしら?」

「……そうするか」

アタシもここにいるのが少し気まずくなつてきたので、早く保健室から出かけよう。

「なあ、優子…」

「ん、何よ?」

政宗がベッドから立ち上がり、二つを見る。

「進路はもつ決まつてこるのか?」

政宗には似合わない台詞だわ。今の政宗は『今が楽しければそれでいい』みたいな考え方で動いてると思つてたわ。

「まあ……興味ある大学はあるんだけど」

「実はや……俺、親父の仕事を継ぐことになつているんだ」

「…………え？」

政宗のお父さんつて、外交官の仕事だったよね？それを継ぐつてことは……、

「俺は後、2年しか自由に生きれないんだ……。卒業後はまた親父にいつもやく言われる毎日だからな。それで愛想尽かしてお母さんは別居つてわけだ」

「…………また会えなくなるの？」

「…………かもな」

政宗が窓の外に手をやる。外にはサッカーをやつている男子が何人かいた。きっと政宗は「自由な奴らだな」とか思つてるのかな？自由を望んでいるならお父さんの仕事なんで継がなきゃいいじゃない。

「何で継ぐことになつたのよー？」

と、つい大声を出してしまつアタシ。

「俺だつて嫌なんだよーーでも、『継ぐならお前に自由な時間を与えてやる』って言われたんだよーーこんなことしないと優子や秀吉にも会えなかつたんだよーー」

継ぐかわりに自由な時間が貰えるとこつ条件を呑んだのー？何でー？

「何でー？アメリカで自由に暮らせばよかつたじやないー？」

本当は政宗が同じ学校に転入してきた時はすく嬉しかった。でも、政宗はそのために将来を犠牲にした。アタシはそれが許せなかつた。

「優子つ……俺はな……唯一友達だったお前つらと一緒に過ごしたいんだよつ……」

「……！」

政宗のトラウマを思つて出す。あんなことがなければ、あの時もつといい方法があれば、もつてつにだと止まらない。

「悪いけど俺は将来を捨ててここに来た！別れの言葉もなかつたらな……でも今度は……わやんと聞かれるからな！」

「政宗……」

今度は別れの言葉をわやんと聞かれる、それまつまつ卒業したり会えなことつづつ。なう……、

「……」めぐ。怒鳴るつもりはなかつた

「政宗……」

アタシは決意した。

「ん？ なんだ？」

「この学園は異常だからね……2年間楽しく過ごせりやつよ……」

手を差し伸べた。今は状況が違うけど、昔も差し伸べた。最初は拒否されたけれど、だんだん政宗は心を開いてくれた。

「優子がそんなこと言つなんてな。……おつじゅ……やつてやるか……！」

政宗もノリノリだった。昔からこうするのが好きだったからね。

「でも！次の授業は休みなさい」

「…………えーーい」

アタシは保健室の扉を閉めて、Aクラスに向かった。これから2年間楽しく生きようとするアタシは、きっとこれを心のどこかで望んでいたと思った。

第七回田（後書き）

政宗「神城がデレたな」

作者「まあ、神城ルート入つてもいいけど原作破壊はちょっとね」
明久「ええっ！？神城さんがデレたの！？いつ、どこで、誰の所為で！？」

作者「ちょっと黙りなさい」

明久「…………（うわ！？喋れない）」

作者「俺が介入していいかな？」

政宗「やめろ。原作破壊は免れないからな」

作者「確かにな」

早苗「倉石君の妹がまだ吉井君に関わってないですよね？」

作者「2巻の文化祭からだから」

レン「まだ、出番なしですか……」

作者「大丈夫だつて。2巻の後は番外編とかで出しまくるから」

政宗「よかつたじゃないか？レン」

ムツツリー「.....収入が増える」

作者「おいおい.....」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873x/>

バカと天才とAクラス

2011年11月21日09時40分発行